HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中学生の仲間集団間の社会的地位と学校適応における関連性の検討 ： 「スクールカースト」という現象に注目して［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	水野, 君平
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第13777号
Issue Date	2019-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75789
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kumpei_Mizuno_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

様式９

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：水野　君平

主査 准教授　加藤　弘通
審査委員　副査 教授　　小内　　透
副査 准教授　大久保 智生（香川大学教育学部）
副査 講　師　鈴木　　翔（秋田大学大学院理工学研究科）

学位論文題名
中学生の仲間集団間の社会的地位と学校適応における関連性の検討
―「スクールカースト」という現象に注目して―

本論文は「スクールカースト」と呼ばれる仲間集団の地位格差と学校適応の関連を検討することで、学校現場で生じる問題や現象について新たな視座を提供しようとする試みである。スクールカーストは、近年、急速に注目を集めるようになった概念であり、いじめや学校不適応との関連が指摘されてきた。しかしその一方で、注目度の高さに比べ、実証的な研究は少なく、その多くは教師や評論家をはじめとする現場経験にもとづく指摘に止まるものであった。そのため、スクールカーストの概念規定や実態については不明確な点も多く、特にいじめをはじめとする問題行動との関連は未検討な課題であった。それに対して本論文は、延べ 7,000 名を超える中学生と大学生を対象に 7 つの質問紙調査を行い、スクールカーストの実態および学校適応との関連とそのメカニズムを明らかにし、この分野における学術的な知見と実践的な示唆を提供するという意義をもつものである。

第 1 章と第 2 章では、仲間集団の先行研究のレビューを行い、スクールカーストを定義し（研究 1)、①実態についての基礎的知見の不足、②学校適応やいじめといった他の諸現象との関連およびそのメカニズムが検討されていないという研究課題を指摘した。

第 3 章では、スクールカーストの実態に関し、それが実際にどの程度存在していたと認知されているのかを確認した（研究 2)。第 4 章では、スクールカーストといじめ加害・被害との関連を検討し（研究 3・研究 4)、その結果、加害との間には一貫して関連が見られなかったのに対し、被害との間では関連がみられ、低地位の生徒のほうがいじめの被害に遭いやすく、また被害に遭うと解決しにくいことが明らかになった。

第 5 章では、複数の調査にもとづきスクールカーストと学校適応の関連を検討し（研究

5)、その両者を差別的な態度が媒介することが明らかにされた（研究 6 ）。そして第 6 章では、実践的な関心から学級差に注目し、どのような条件があれば、スクールカーストが学校適応に与える負の影響を低減できるかを検討した（研究 7 ・研究 8)。

以上をまとめ第 7 章では、総合考察として、本論文がもつ従来の仲間関係やスクールカースト研究に対する研究的な意義と教育現場に対する実践的な意義を議論した。

本論文の意義をまとめると以下の 3 点を指摘できる。第 1 にスクールカーストという新しい概念を精緻化し、その定義を明確にしたことである。これまでの研究では他の類似した概念とスクールカーストでは、何が異なるのかなどが十分に検討されておらず曖昧なまま使用されてきた。それに対し本論文では生徒個人間の序列を表す人気（popularity）や、生徒タイプのカテゴリー（例：オタクなど）を表す群衆（crowd）など類似した概念と比較し、検討を加えた。その結果、スクールカーストは個人ではなく集団間の序列を表し、主として学級内に限られる概念であるという点で他の概念とは区別されると定義を明確にした。

第 2 にスクールカーストと学校適応やいじめといった諸問題との関連性を明らかにしたことである。これまで多くの研究や論考がスクールカーストといじめや学校不適応との関連を指摘してきたが、その多くは実証的な検討を欠いていた。それに対して本論文は複数の調査を通して、より詳細にその関連を明らかにした。加えてその検討過程を通して学校適応がもつ否定的な側面についても明らかにした。具体的には、スクールカーストにおいて高地位であることは、学校適応を高めることに繋がっていた一方で、その過程で高地位の生徒は差別を肯定するような態度も高めていた。つまり、これは学校適応が良い面だけではなく、否定的な面をもつことを明らかにしており、学校適応＝善を暗黙の前提とし、その向上を目指してきた多くの教育心理学研究に対して、その見方に変更を迫るものであるといえる。

第 3 にスクールカーストの負の影響を緩和する条件を集団レベル（序列の明確さ）と個人レベル（同学年の学級外の人間関係の存在）で明らかにしたことである。これは単にスクールカーストの善し悪しだけではなく、それが避けがたく生じてしまう教育現場において、それに対し教師は何ができるのかといった実践的な示唆を与えるものである。

以上をまとめると、本論文はスクールカーストとは何かという対象規定を明確にし、どのような問題と関連するのかそのメカニズムを明らかにした。そして、その上でどうすればスクールカーストがもつ負の影響を抑えることができるのかといった実践的な示唆までを含んでおり、教育心理学研究として高い価値を有するものであるといえる。

最後にいじめ被害との関連を抑制する条件など、さらなる検討が必要な課題も残されている。しかしながら、これらの課題も本論文の不足点を示しているというよりも、スクールカーストに関する今後の研究の方向性を示唆するものであるといえる。その意味で本論文は、スクールカーストに関する新たな知見を提供するのみならず、これに続く研究に対して、新たな研究領域を拓いたともいえ、その貢献は高く評価されるべきものである。

よって著者を北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格がある者と認める。

以上